

匍匐前進

高木さんが、いらしてくださいました。

おいしそうに昼ごはんを召し上がってくださいる。

「近かったら、毎日来るのにねえ」

「ひとり暮らしは、野菜をだめにするから、ここでいろいろ食べられるのは、うれしくてねえ」

お昼休みがすぎると、高木さんのほかは誰もいなくなつた。

「ほふくぜんしんって言葉、知ってます？」

店主に尋ねる高木さん自身、このごろ耳にしない言葉だった。

それなのに、孫娘が毎日やっているとは。

当人は、その動作が、匍匐前進というとは知らないらしい。

近頃の高校生で、携帯電話を持ち歩かない子がいたら、よほどの変わり者に違いない。

「クラブ活動中は禁止って、そりゃあたりまえですよねえ。」

それですら、あの子達は不満らしいの「一応、先生の言いつけは聞いているが、クラブが終わったとたん、メールのやり取りは始まる。」

「あの子、バスケットボール部なんですって」
バスケット部だから、体育館の端に、みんなの携帯が並んでいる。

お疲れさま、の掛け声が終わるやいなや、みんな、携帯電話に走り寄る。

そこからだ、世にも珍妙な光景が出現するのは。体育館の床を、ジャージ姿の高校生が匍匐前進する。

携帯電話を握りしめ、耳に当てながら。

座り込んでメールを打つ子。

匍匐前進して、メールを送信する子。

「あの子に言わせると、膝と肘歩きなんですって」
そういう動きを、ほふくぜんしん、と教えてあげたらしい。

「おばあちゃん、物知りだね」

高木さんのお孫さんは、素直に驚いた。

先生は怒らないのかと、高木さんはたずねた。

高木さんの時代なら、先生が黙ってはいはしない。

「先生は、注意するよ。見苦しいって」

ところが、ある日、先生に奥さんから電話があった。

体育館の端に立って電話していたはずの先生が、突

然、匍匐前進を始めた。

「もう、先生の威厳もなにもあったもんじゃないやありませんよねえ」

体育館の中は、電波が極端に弱いらしい。

先生の奥さんが、そんなことを知っているはずもない。

緊急電話なのかもしれないが、まさか、そのために夫が匍匐前進しているとは。

実は私も匍匐前進している。

以前なら、当たり前前の動作。

雑巾がけだ。

しかし、今日だけは高木さんには言えなかった。